研究ノート：ハイチ文化における植物的空間

荒　井　芳　廣*

Research Notes for Botanical Spaces in Haiti

Yoshihiro ARAI

Abstract

This paper is a preparatory notes for the future researches in Haiti and Brazil, titled as "Comparative study about native ideas on the uses of natural resources".

In the present paper, the following five subjects are examinted:

(1) Vegetal Enviroments for Haitiens: Plantation, "lakou", "jaden",
(2) Traditional Medecine,
(3) Cockery,
(4) Plants in Voodoo,
(5) Themes of Plants in Haitien Folktales.

§1 はじめに

本稿は，筆者がこれまでカリブ海のハイチ共和国でおこなってきた民話および宗教についての調査のなかから，この国の文化における植物のもつ意味について要約したものである。と同時に1990年の8月におこなった予備調査および1991年以降にハイチならびにブラジル北東部でおこなう予定の「自然環境利用に関する土着的思想および宗教についての比較研究」のための序論をなしている。

当面の主題として次の5つのテーマを考えてみた。この分け方にはなんらの理論的根拠があるわけではない。以下に挙げるような既成の捉え方のもとに分類される現象のあいだに我々には未知の関連を見出すことが，我々の最終的な目的であるから，これからおこなう記述の仕方はあくまでも仮のものであると言ってよい。

1. ハイチ人の植物的環境：プランテーション，ラクー，ジャデン
2. 伝統医療
3. 料理
4. ヴォドゥにおける植物
5. 民話のなかの植物

平成2年9月28日受理
* 一般教育学科

§2 ハイチ人の植物的環境：プランテーション，ラクー，ジャデン

植物と人間の関係が人間生活に与える影響は，その社会の空間形成の原理として作用することに由来する。ある社会の植物学的環境は，まずその生態学的諸条件により決定される「自然」として与えられる。このときすでに地理的位置を異にする他の社会とは異なった環境をもつことになる。しかし純粋な自然的状態は一つの仮定としての出発点であり，採集・栽培にかかわらず，またその形態がどんなに単純なものであっても特定の植物を有用植物として選んだとき，その植物的環境にはひとつの秩序が存在する。動物の場合には例えば，ペット，家畜，食用される野性動物，食用されない野性動物と，食用可能性にしたがった秩序がその社会の動物的環境のなかに形づくられる。植物の場合にもまったく同様に食用，その他の有用性，観賞などの機能に従って，その社会の植物的環境は新たに編成される。従って自然状態からぬけ出たばかりに見えるきわめてアルカイックな社会の場合にも我々から見て驚くほどに精密な植物分類学を発達させている。歴史をもつ社会の場合にも現実の生活から独立した自律的な体系を発展させた近代科学とは別の，日常

生活に密着した体系がその社会の経済的文化的構造の在り方に応じて存在する。従って歴史の内部にこうした構造の変化が見られるとき，その社会の人々と植物との関係にも変化が現れる。ハイチというカリブ海の一小国の場合にもその住民の植物的環境に歴史的変化が映し出されている。

そこでハイチという国を一つの地域としてその特性を考えるとき，考察を始める歴史的時点をどこに設定したらよいかという問題が起きてくる。この国は1806年にアフリカ人奴隷の反乱から始まった革命の結果としてフランスの植民地であったそれまでの状態を脱して独立した。国民の90%以上がアフリカ人奴隷の子孫であって他のアメリカ大陸諸国と違って先住民の末裔は存在しない。アフリカ人奴隷は，他地域と同様に植民地プランテーションの労働力としてこの地域に連れてこられたのであるが，他地域と異なり彼らが到着した時点において先住民は絶滅してしまっていたと言われる。従って先住民からは「自然」としての植物的環境をある程度受け継いだが，「文化」としての植物的環境，すなわち植物に対する知識やイメージの体系を受け継ぐことはなかっように思われる。ハイチと同様にアフリカ系住民の文化が発展した地域でも，先住民が生き残ってその社会の人口の一部を構成している場合には，知識の継承，交流，混交がおこる。奴隷制廃止以後の社会ではその可能性は高いが，以前の社会における先住民文化とアフリカ人奴隷の文化の劇的な例は，ギアナのブッシュ・ニグロの文化に見られるような逃亡奴隷（そしてその集団）と先住民の文化的出会いである。しかしハイチの場合にもまた他地域の場合にも，アフリカ人奴隷はプランテーションの労働者としてそこで栽培される単一の植物の生産システムのなかに自分の生活の大部分を自分の意志とは関係なく投入させられたのである。

タイプ〈1〉：プランテーション

植物と人間の関わりにおいて量的な観点から重要な位置を占めるのは，農業あるいはもっと一般的に栽培という形態であろう。「量的である」ということを強調するのは，我々がこれから論ずる事例において，この関係が必ずしも人間と植物とのあいだの具体的で細やかな交わりを示すものではないからである。植物と人間の関わりを規定する大きな枠組みとして生態的条件があり，農業ないし栽培はそのなかから特定の植物を選択することに成立する。植物の栽培は，動物の飼育と同様に，労働の時期，労働の性質と労働の時間的長さ等々，人間の行動を規定する。そこに人間の自然に対する生態的適応が生まれ，これを広い意味での文化と呼んでいる。サント・ドミンゴ島の西半分に住む現代のハイチ国民の先祖は，この地の先住民ではなくアフリカ人奴隷である。彼らは当時世界で最も繁栄していた砂糖黍プランテーションの労働力としてアフリカ大陸から自分の意志ではなくこの地に移住することになったのである。従って彼らの存在自体が奴隷制を基礎とする単一植物栽培という近代プランテーション・システムのなかの一要素として，このシステムを一つの適応形態として選択する主体ではなく，砂糖黍と彼らのあいだの関係はきわめて抽象的なものであった。もちろん植民地としてのハイチの経済を支えた輸出農産物は砂糖黍だけではなかった。時代が下るにつれコーヒー，藍，綿花，カカオなどが生産され，栽培される作物によっては生産システムにも自営農などが現れてくる。その変化が奴隷解放革命，独立，独立後の政争などハイチの歴史を進める動因となったのである。

タイプ〈2〉：ジャデン（jaden）

単一植物の栽培を基本とするプランテーションでの日常生活のなかでの，義務として栽培することを余儀なくされる植物以外の，植物との関わりの第二の形態は日常の消費のために許された小規模な作物の栽培である。1806年の独立以降，奴隷の身分から解放されたハイチ国民の大多数を形成する農民は，以前からの支配階級ばかりでなく独立達成に功のあった英雄たちおよびその後の国家リーダーたちの多くがプランテーション農業の再編に努力したにもかかわらず，小規模自営農民（土地所有の形態は自己所有であれ小作であれ）であることにこだわった。そのうえフランス革命の直接的影響下で独立を果たしたこの国の民法はすべての子供に財産の均等相続を認めたため，独立から何世代か経つと耕作地は細分化し，表1が示すようにハイチ農民の大多数はほんの僅かな土地を耕して暮らしている。ハイチ農民の日常生活が営まれる，ハイチ経済の基本的単位であると同時に最も身近な植物世界は「ジャデン」（jaden＝クレオール語＞jardin＝フランス語）である。R. バスチアン（Bastian：1985）はジャデンを図1のようにモデル化する。この空間において現代のハイチ農民は複数の植物と具体的な関わりをもつことができよるようになり，ハイチ人の植物をめぐるイメージや伝承は大半はこの空間のなかで展開するのである。（図1）

表1.　ハイチ農民の土地所有の状況（4県の比較と平均）

Departements	0, 50 ha 以下	0, 50～1 ha	1～2 ha	2～3 ha	3～5 ha	5 ha 以上
Nord	11　%	24.9%	33.7%	14.9%	9.5%	4.9%
Nord-Ouest	14.8%	26.5%	28.9%	13.5%	9.9%	6.4%
Artibonite	12.2%	22.1%	31.5%	16.5%	11.5%	6.5%
Ouest	18.7%	23.8%	28　%	13.5%	9.7%	5.3%
4県の平均	12.3%	23.8%	32.1%	15.3%	10.5%	6　%

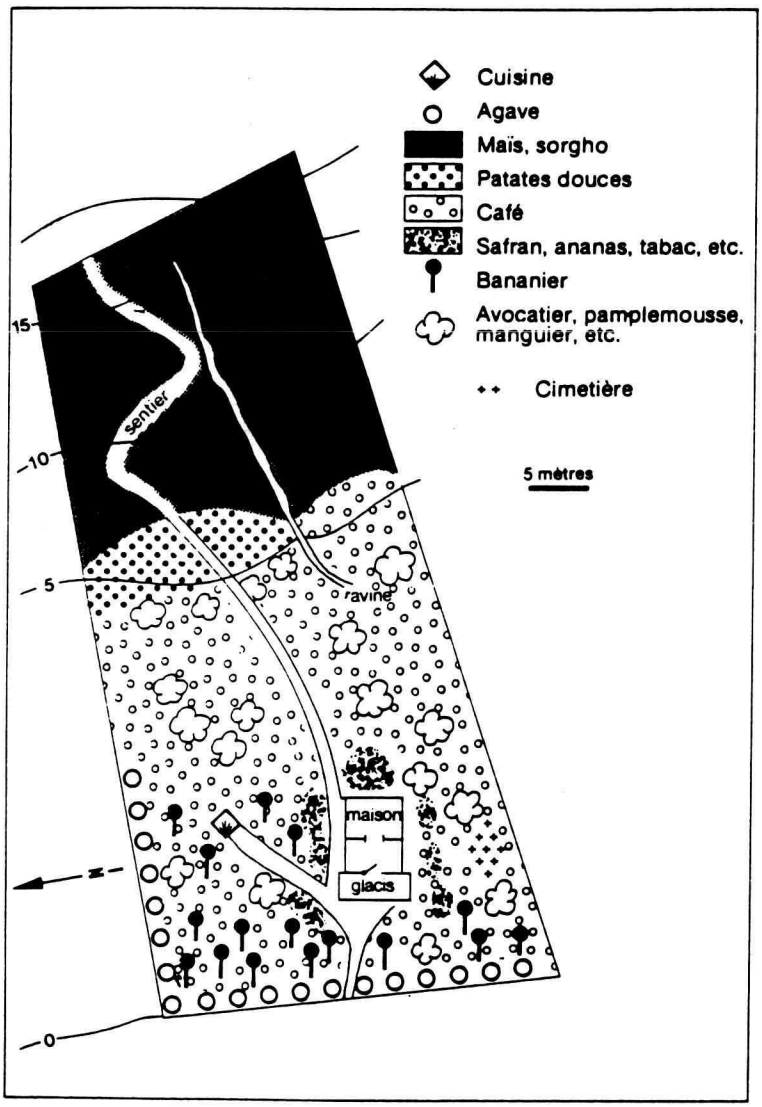

図1.　“ジャデン”の概念図

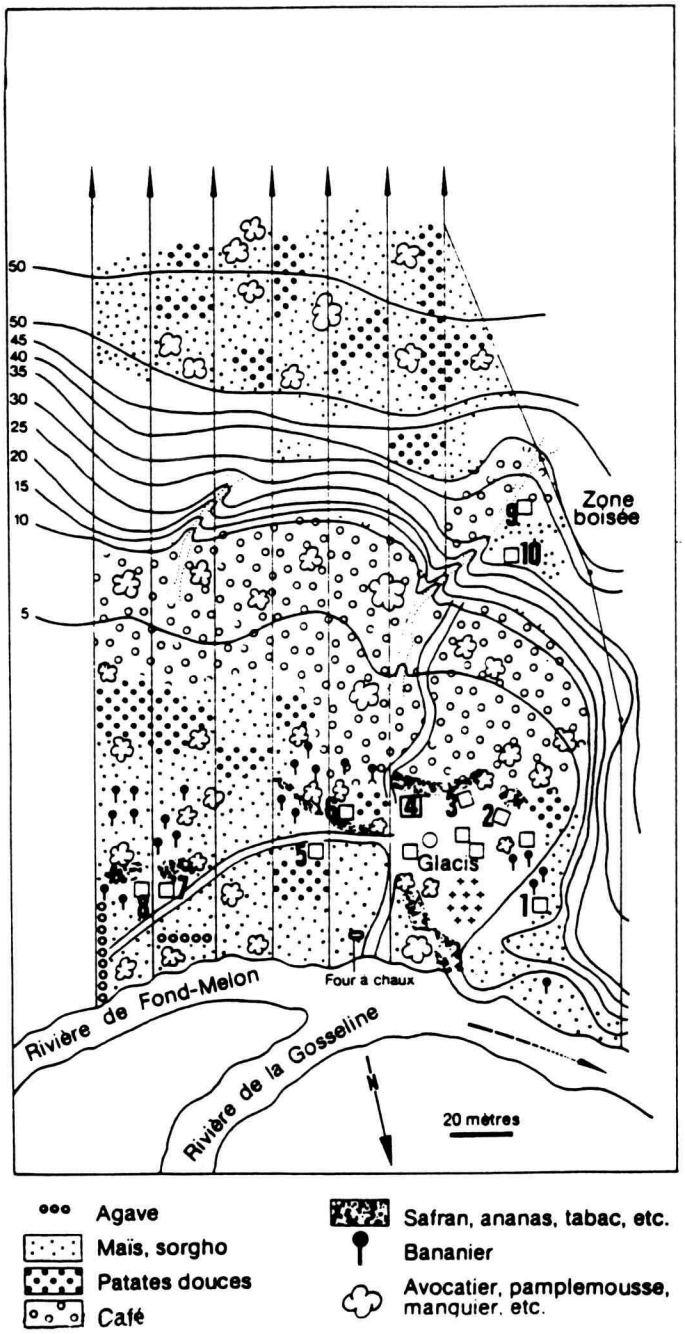

図 2.　“ラクー”の概念図
（Bantian：1985　pp. 46-97 より）

この空間では，住居からいちばん近いところに，サフラン，パイナップル，タバコ，ピメント(Capisicum frutescens)などが栽培され，それを取り巻くようにバナナの木が散在する。これに続く土地には背の低いコーヒーの木が植えられ，それらのあいだにアボガド，グレープフルーツ，マンゴなど背の高い木が植えられる。住居から最も遠い斜面の低い部分にはサツマイモ，ジャガイモ，マニオクなどの根塊類が，斜面にはトウモロコシ，プチミルなどの穀類が栽培される。この小さな土地に自分たちの食料にする自家消費用の作物と市場に出荷し現金あるいは日常の道具類と交換する換金作物の両方が栽培されているのである。

タイプ〈3〉：ラクー（lakou）

プランテーションとジャデンという二つのタイプの空間のあいだにはもう一つのタイプが存在する。「ラクー」(lakou＝クレオール語〉la cour＝フランス語)と呼ばれる空間である。ジャデンと同じくR.バスチアンは図－2のようにモデル化している。比較的広い土地の中に同一の家族から出自する数軒の家が散在する。栽培される作物はほぼ同一であるが，ジャデンには見られなかった野草や後述のマプーのような大木が見い出されるであろう。こうした植物的環境のなかで宗教，家族的紐帯，共同労働など社会的共同性の制度と感情がやしなわれたと考えられる。ヴォドゥが，プランテーション奴隷のメシア運動でも，零細農民の運命論的世界観でも，都市下層民の現世的な妖術(witchcraft)でもない，大地と共同性に強調点を置く民俗宗教としての側面を発展させたのはこの時期であったと思われる。しかし先に述べたように革命から時代が下るにつれてむしろ必然的にラクーは消失の道をたどる。それと同時にラクーに基礎を置いていたさまざまな感情と制度――例えば民俗宗教としてのヴォドゥ――は変化を余儀なくされ，その変化のはざまで互いに矛盾する方向性が葛藤する。それが現在のハイチの状況である。森林の伐採など生態学的問題を生みだし発展を妨げる社会的共同性の欠如に対し行政側の努力として提唱されているのが「セクション・ルラル」(Section Rural)と呼ばれる空間単位であるが，行政的権威に対するハイチ農民の不信も手伝って，まだその定着に成功していない。

以上に述べた三つの空間においてハイチ農民は生き，そして以下に述べるような思想を育んできたのである。

§3　伝統医療

栽培植物は人間と植物的環境の関わりの一次的形態であるが，これに対し自然環境の利用の土着的形態として重要なのは「薬草」である。薬草として利用される植物は栽培植物より以上に野生の植物を含み，量的な観点からすれば，市場作物や自己消費用の栽培植物に比べずっと少ないが，反対に種類の上ではより多い。従って生態系への関わりもより深い生活領域だといえよう。奴隷社会として出発した，アフリカからの移住民が住民の大半を占めるハイチにおいても，薬草に対する知識の体系はそれなりの発展をし，薬草医者あるいは薬草博士(docteur-feuille)と呼ばれる専門家のカテゴリーが生まれた。薬草として利用される植物はもちろん，彼らが自分の意志とはかかわりなく投げ込まれ，取り巻かれることになった環境のなかに現実に存在する植物であって，想像的なものではない。しかしこれに対応する知識の体系は――薬草に対する知識に限らず次節で述べる宗教の場合にもあてはまるのであるが――，新大陸全体に分布するアフリカ人奴隷の末裔の社会，すなわちアフロ・アメリカンの社会では，必ずしもすべてが現実に目の前にする環境のなかで発展したとはいえないであろう。奴隷たちの出身地であるアフリカのどこかで発展した知識が，アフリカ大陸と新大陸の両地域に共通する植物に対して適用されたということは十分考えられる。現在から考えれば遠い時代の記憶をよく伝承できたと思えるが，この伝承は，アフリカ人奴隷が新大陸に足を踏み入れたその日から始まっていた可能性は十分にある。現実的な対応物を必ずしも必要としない宗教的知識の体系のばあいにはそれよりも早く，同じ船に乗せられた奴隷同志の相互扶助として，すでに「奴隷船」のなかでアフロ・アメリカン独自の宗教体系の形成が始まっていたと言われる。

現代ハイチで観察される伝統医療の体系のなかで「薬草医」は，社会的カテゴリーとして「ヴォドゥの宗教的指導者」と区別することができない。薬草医は病気の道程や病因の説明のさいにヴォドゥの体系を借用する。これに対しヴォドゥの聖職者は治病の手段や植物の呪術的使用に関する知識を薬草医と共有する。実際，薬草医とヴォドゥの聖職者（男性をウンガン，女性をマンボと呼ぶ）を兼ねる者もたくさんいる。その結果，一般的なイメージとして薬草医とウンガン（またはマンボ）と同一視する傾向がある。しかし薬草医

のすべてがヴォドゥの司祭または信者であるわけではない。そこでハイチ農民の心性のなかでの医療にたづさわる人々がどのように分類されているかを見てみよう（Delbeau: 1990）

(1) "Les Marchandes de feuilles"（薬草販売人）
ポルトー・プランスでは大きな市場の一角には必ず数人の薬草販売人がいる。本来は農村部において薬草を行商して歩く人間を指す名称であったようである。

(2) "Voyants"（見者）
依頼人に応えて何らかの手段によって病状を診断しこれに対する処方を指示する人間で，病因の説明とそれを知る手段や処方の仕方により，次の段階である治療の方法と相談すべき人が異なってくる。

(3) "doktoe"（普通の意味での医者）

(4) Le Magicien-guerissuer（呪術一治療師）
さまざまな起源の神秘思想の影響からの霊感に基づいて呪術的な治療をおこなう者。かなりの数が存在すると言われる。

(5) Le "Dokte-feuilles"（薬草医）

(6) "Houngan"（男性）あるいは"Mambo"（女性）
ヴォドゥの宗教的リーダーで（5）を兼ねることもあるが，本来的には信仰治療にたづさわる。

(7) Le "Boko"（妖術師）
ヴォドゥの宗教的職能者で邪術もおこなう者。

(8) Le "dokte ki kon mani"（接骨医）

(9) "dokte ki kon rale"（マッサージ師）

以上二つのカテゴリーはいわゆる専門医である。

これら8つの役割の各々がすべて異なる人間によって分業されることも，一人の人間によっていくつか複数の役割を兼ねることもある。ハイチの首都ポルトー・プランスにある大きな市場の一つであるソロモン市場で，他の生鮮食料品に比べ周辺的な場所に売り場のある「薬草販売人」(1) たち（すべて女性であった），ある者は「薬草医」(5) と「マッサージ師」(9) を兼業し，ある者はヴォドゥの女性リーダーであるマンボであった。後者はまた相談者の依頼に応じて病気の診断を行って病因を明らかにし，適切な対処法を指示する占い師(2) 的な役割をも行っていた。この事例にあるようにハイチの伝統医療はヴォドゥと深い関係にあり，一般の人々は，「ウンガン・マンボ」(6)，「ボコ」(7) とほとんど同一視している。しかし薬草医としての技能および薬草とその処方に対する知識の習得について，薬草医たちは神秘的インスピレーションあるいは動機（自分の治病体験にまつわる奇跡譚など）を強調するが，それらは必ずしもヴォドゥ的なものばかりでなく，したがって薬草医がすべてヴォドゥの信者であるとは限らない。

表2は，薬草販売人が売る薬草の例として筆者がソロモン市場で購入した薬草のリストである。薬草医の処方の例を挙げておこう：

腹痛に対しては，スイートオレンジの葉／出血に対しては，コロッソル，マンゴ・フィル，アチヨヨ（Occimum gratissimum），チ・コリの葉と，ペタの根……。

ちなみにコロッソルの葉の成分は次のように分析されている（Weniger et al.: 1989）：

alkanoid ＋ saponins －
steroids, terpenoid ＋ phenolic compouds －
quinones － tannins ＋
flavonoid ＋

§4 料　　理

ハイチの人々が食用としてどのような植物をどのように調理してどの位の量を用いるのかという点に関しては，種々の観点から論議されている。貧困のために栄養不良状態にあるハイチ人の食習慣，料理法に見られるアフリカ的要素とその変容，階層による食習慣の違い，食品流通における女性の役割など社会学的・人類学的観点からも興味深い主題を提供してくれる。ここでは分析の出発点である表徴の一つとして中層の農民の食習慣について例を引こう。ハイチの社会学者，コメール＝シルヴァンは首都ポルトー・プランスの郊外，山間部にあるケンスコッフの調査から次の二例を挙げている。

「朝，母親は，コーヒーを入れ，砂糖きびのシロップまたは黒砂糖で甘味を加える。主となる食事は正午に取り，チョウテ瓜またはカボチャ入りのトウモロコシのまんじゅうを食べる。夜は何本かのサツマイモで十分である。日曜日には肉を食べるが，豚肉が一般的である。父親が雄牛や子牛を飼っていても，子供たちが牛乳を飲むのは売れ残った時だけである。鶏の卵も同様である。時たま母親は脂身と特にたくさんの芋を入れたおいしい「田舎風スープ」（soup zabitan）をつくるが，例えばニンジンのような野菜を使うのは例外的なことである。いくらかのお金をもった子供はマニオクでつくった「カッサーブ」（cassave），カステラ，旬

の時はたくさんのマンゴを買う」(Comhaire-Sylvains: 1952)

「……この村の食生活は同郡の他の地域に比べましな方である。例えばケンスコッフの南へ10キロ弱のところにあるフュルシイでは，日に二回しか食べない。朝，家族はコーヒーと，牛を飼っていればおそらく牛乳を飲む。あるいは母親はアボガドまたはカステラを買う。昼には何も食べない。夏には固いバナナが子供たちに与えられる。夏が過ぎるとひきわりトウモロコシ，またはチャカ（tchaka，ひきわりトウモロコシを赤豆や肉と煮込んだもの一筆者註）を食べる。年間を通じて使われるのはサツマイモで，トウモロコシや料理用バナナは取り入れが始まるとまもなく家庭の食卓から消えてしまう。」(同上)

このようにハイチ農民の食生活の領域もまた「ジャデン」を大きく越えることはない。

§5　ヴォドゥにおける植物

ヴォドゥにおける植物の使用ないし植物の意味は前節で述べたよう伝統医療と無関係ではない。ここでは，ヴォドゥの精霊崇拝と植物の関係を述べよう。第1節でハイチ農民を取り巻く植物的環境について述べたので，この宗教が信者たちを取り巻く自然環境といかに深く関わっているかがただちにわかるであろう。そこでまず憑依と供犠を通じてコミュニケーションが行われるヴォドゥの神格的精霊の属性とこれに関連する植物を述べよう。ヴォドゥの神的体系のなかの主神的な存在は，「ダンバラ」(Dabala)と呼ばれ，富，幸運，幸福など善の原理を司り，蛇の形で表される。水源や川を棲み家としすべての木を好むが特に綿や絹の木を好む。

「エジリ」(Eziri)という愛の女神は，ハートの形で表されるが，好みの木はシウエル(cirouel，学名 Spondias purpurea）である。

「シンビ」(Simbi）とドス（Dosu）の好む木はマンゴの木（manguier）やヒョウタンの木（calebassier）で，水源，洞窟，山に棲む川や沼の主で，その属性は不幸である。

「オグ＝フェラユ」(Ogu Feraj)は貧困に対する戦いの象徴として騎士あるいは兵隊として形象化される。竹やヒョウタンの木に棲む。好みの木もヒョウタンである。

「レグバ」(Legba)は，ダンバラのライバル的存在の

写真1.

精霊で，十字路，家の敷居，柵などに棲みそれらの場所の守り神となっている。好みの木はシウエル（cirouel）である。

「ロコ」(Loco)は，治病に関わる神格で，「薬草医たちの守護的治療者」である。木々を棲み家とし砂糖黍とパイプを持った農民として形象化される。アボガドの木（avocatier）を好む。

「ザカ」(Zaka)は，農業の神で畑に棲む。都会人に敵意を抱く農民として形象化される。

「ゲデ」(Gade）は死と関わりのある精霊の総称で，「バロン＝サムディ」(Baron Samdi)はゲデたちの長，「グラン＝ブリジット」(Gran Brizit)はその妻である。ゲデはレモンの木(citronnier)を好み，墓地に棲むが，グラン＝ブリジットはマプーの木（アフリカではバオバブと呼ばれる）に棲むと言われる。

ここで言う「精霊の好む木」というのは，野外での儀式のさいの祭壇としてその木の周りで儀式の行われる精霊たちの棲む木のことである（写真－1)。マンゴの木，ヒョウタンの木，アボガドの木など，その多くは背の高い木で，なかでもマプーの木は巨木であり，ハイチの人々はこの木に対して特別の感情を抱いている。これについては次節で述べる。

ヴォドゥにおける植物の使用としては，《bain》(沐浴）と呼ばれる行為またはものも重要である。この場合の「沐浴」は，薬草の風呂という意味でもあるが，呪術的な意味での沐浴，病人または禍をもつ人間あるいは何か願い事をもつ人間が植物を主成分としたドロドロした液体を塗った身体を水につかってすすぐ行為をも指す。この液体の処方は，その行為をおこなう目的に応じて異なってくる。不運あるいは邪悪な霊のわざわいから自分を護る沐浴の例を挙げると（Bellard: 1980)，

ave（クマツヅラ）の葉を7枚

表2.　ソロモン市場で売られていた最も一般的な薬草

クレオール語の呼称	学名（和名または属名）	ハイチにおける主なる用途
armoise	Artemisia vulgaris （ワームウッド）	てんかん，痙攣，ヒステリー
assousi	Momordica charantia （ツルレイシ，ニガウリ）	熱，皮膚病，食欲不振，貧血，捻挫 外傷
basilic	Occimum basilicum （メボウキ，バジル，バジリコ）	消化不良，下痢，炎症
boi caca	Capparis cynophallophora （フウチョウボク属）	風邪，恋愛の成就 新生児の保護，ルーガルーの駆逐，厄のついた家のお払い，
cachiman	Annona reticulata （ギュウシンリ）	動脈硬化，消化不良
cafe	Coffea arabica （アラビアコーヒーノキ）	心悸高進，下痢，絞扼性ヘルニア，悪寒
calebasse courant	Crescentia cujete （フクベノキ）	利尿，催淫，肺疾患，下痢，淋疾，眼病，熱
casse se	Cassia fistula grandis （ナンバンサイカチ）	
citoronelle	Cybopogon citratus （レモングラス）	胃痛（葉を煎じて飲む），強壮，熱
coulent	Erygium foetidum （ヒゴタイサイコ属）	外傷
crossol	Annona muricata （トゲバンレイシ）	インフルエンザ，貧血，催淫，悪寒
hareng	Ancathospermum Humile	外傷，かゆみ，痛み，捻挫，子宮筋腫
la chose	Pluchea odorata （ヒヒラギク属）	催淫，リューマチ，気管支炎，気ふせり，解毒
laloi	Aloe vera （バルバドスアロエ）	強壮，下剤，月経促進，神経疲労，浄血，悪霊を払う
langue de chat	Eupatorium odoratum （ヒヨドリバナ属）	風，咳，インフルエンザ （葉を煎じて砂糖を加えて飲む）
loup-garou	Kalanchoe pinnata （セイロンベンケイ，トウロウソウ）	風邪，熱，腎結石，催淫，催眠，ルーガルーのおはらい
persil	Petrosalinum Sativum （パセリ，オランダゼリ属）	
semen contra	Chenopodium ambrosioides （ケアリソウ）	寄生虫
souci	Caiendulaofficinalis （キンセンカ）	傷，月経促進，胃炎，浄血
sureau	Piper aduncum amalago （コショウ属）	浄血，淋疾
ti-baume	Mentha citrata （ハッカ属）	催眠，肺疾患，喘息，催淫，眼病
trois paroles	Allophylus occidentalis （アカギモドキ属）	催眠，悪寒，百日咳，仙痛
verveine	Stachytarpheta jamaicensis （ホナガソウ）	寄生虫，貧血，精神的ショック
zo douvant	Eugenia crenulata （フトモモ属）	強壮
zorange	Citrus sinensis Osbeck （スイートオレンジ）	熱，咳，嘔吐，下痢，歯痛など他の植物に混ぜて多用途に

(1) ハイチのクレオール語には統一的な正書法がないので慣習的な書き方にしたがった。
(2) 和名は『世界有用植物事典』（平凡社，1989）に従った。同書に記載のない場合には同じく同書の属名を挙げた。
(3) ハイチに関して報告されている用法のみを挙げた。

persil（パセリ）とechalotte（エシャロット）を7束，
parfum florida
clairin（安価のホワイト・ラム）
honte（オジギソウ）の葉）
assourosi（ツルレイシ）の葉
coulante（ヒサダイコ）の葉
“gate ca”（pois congo,キマメ）の葉
armoise（ワームウッド）
citrons（ライム）
alcali（苛性ソーダ）
capable（フカノキ属）の葉
“ti baume”（ハッカ）の葉
eau de forge
灰を少量

このように実にたくさんの薬草が用いられる。表2に示すように，前節でふれたソロモン市場の薬草販売人が売る薬草類にはこの沐浴用の野草も含まれていることがわかる。この事実はヴォドゥの呪術的な沐浴が一般に広く行われている行為であることを物語っている。

§6　口頭伝承のなかの植物

クレオール語という基本的には文字をもたない（正確には正字法あっても国民の大半がそれを知らない）がゆえに豊かな口頭伝承をもつハイチにおいて，植物は，宗教としてのヴォドゥも口頭伝承の重要なジャンルであるが，諺，謎々，歌謡，民話など，いわゆる口承文芸のなかで，比喩的表現として，あるいはそれ自体が主題として頻繁に現れる。ハイチの口承文芸，とりわけ民話の重要なモチーフとなる植物として代表的なマプーの木を例に取ろう。マプー（mapou）の木の学名については報告者によってくい違いがある。例を挙げれば，A・メトロー（1958）はマプーをCeiba pentandra（カポック）としているが，ハイチ人民族学者のJ-B・ロマン（1959）はこれをAdansonia digitata（バオバブ）であるとしている。明らかに異なる木が同一の名称で語られている。メトローの調査は西部地方に属するマルビアル（Marbial）峡谷でおこなわれたものであるのに対し，ロマンの調査は北部のミロ（Milot）でおこなわれた。筆者が観察した首都周辺の何本かのマプーの木はその特徴からCeiba pentandraであった。マプーという名称自体はプレ・コロンビア時代から存在したことが報告されている（Rabat：1973）。しかしいずれの木もハイチには存在する巨木であるので，ロマンの判断を間違いであると決めつけることは早急である。むしろハイチ人自身が異なる木を同一の名称で呼んでいるということは十分考えられる。名称が指示する参照物，すなわちデノーテーションに関する議論は筆者自身が検証したのではないので推測にすぎないが，コノーテーションの次元では，この名称上の混乱は，とりわけアフリカニスト的視点から興味深いことのように思われる。というのはマプーの木に対してハイチ人が与えているイメージは，アフリカの人々がバオバブの木に対してもっているイメージと類似しているからである。すなわち現実にそこにあるのはCeiba pentandraでもまたAdansonia digitataだとしても，ハイチ人がそこに見ているのはAdansonia digitataという議論である。ハイチ人がマプーの木に対してどんなイメージを与えているのか，ロマンの本には次のような話が報告されている：

村の好き者たちの全員と交情していたジョルジーナという名の一人の娘が，行きずりの男からの逢い引きの申し出を承知してしまった。男はこぎれいな家に住んでいるからとジョルジーナを自分の家での食事に招待した。二人が家のあると思われる場所に着いたのは真夜中であった。真夜中といえばゾンビたちがその家の敷地にある大きなマプーの木の下で死のダンスを踊る時刻だ。というのは家とは墓のことであり，男はゾンビだったのだ。ジョルジーナが行きずりの男を抱いたとき彼女の腕の中にあったのはミイラだったのだ。ジョルジーナはショックを受け，近在の人々の話では，それ以降，彼女はこんな危険の伴う職業にはもどらなかったそうだ（Hurbonn：1969による要約）。

マプーの木の例に限らず，新大陸のアフリカ系住民の文化のなかの，ある要素をアフリカのある地域の類似の要素とを比較しようとするアフリカニズムの視点は，個別的要素を詳細に比較するときとりわけ魅力的である。伝統医療の節で述べたようにここには，アフロ・アメリカンの文化の歴史的形成に関して，単一のモデルではけっして捉らえることのできないさまざまな事例があると考えられるからである。

§7　結語に代えて：植物のイコノグラフィー

狭い意味でのイコノグラフィー（図像誌）について言えば，さまざまに意見が分かれているものの，ハイ

チ人，とりわけ農民のなかから絵画的表現を自由におこなうことのできる人間が多数輩出するようになったのはごく最近のことである。すなわちハイチの奇跡あるいはハイチ・ルネッサンスと呼ばれる絵画運動の歴史は第二次大戦後のことである。本稿ではハイチ絵画における植物の表現の豊富な事例を紹介することはできないが，パノフスキー流の思想史，社会史，自然誌などを含めた広い意味でのイコノロジー（図像学）の視点からすれば，すでに絵画的表現以外の領域においてはぐくまれてきた観念，イメージ，行動の存在していたがゆえに，近年のハイチにおける絵画的表現の，氾濫と言ってもよいほどの，開花があったのだということを指摘しておきたい。逆に言えば図像的表現を，絵画の歴史に留まらせず，本稿で述べたことも含めた，ある文化における意味の多重的な層を探る学としてのイコノロジーの大きな解釈学的円環の出発点として，ハイチ文化のなかに参入していく手掛かりとしてもっと利用すべきだと思われる。この研究ノートではあえて異なる研究主題を羅列的に並べた。それらを繋ぐのは「植物」というテーマ，というより言葉であるが，それをキーワードにハイチという国の文化と歴史を知ると同時に，ますます混沌に向かっているように見えるハイチの現況を再び立て直すことがいかに可能かという応用科学的視点をも，この「植物」というテーマは要求しているように思われる。（未完）

参照文献

Alexis, Jacques Stephen 1957 Les Arbres Musiciens, Gallimard.

Antoine, Paul 1980 Place du Palma-Christi dans la Culture Populaire, in Benoit, Max ed. Cahier de Folklore et des Traditions Orales d'Haiti.

Bastian, Rémy 1985 Le Paysan haitien et sa famille, ACCT-Karthara.（1 ed. 1958）

Bellard, Philome 1980 Les Expeditions : Essai sur la Magie Offensive, in Benoit, Max Ed. Cahier de Folklore et des Traditions Orales d'Haiti.

Boliere J. et als. 1974 "Médicine Rural", Haiti Tim Tim（1974-1）

Comharire-Sylvain, Jean y Suzanne 1952 La Alimentacion en la Region de Kenscoff, Haiti, America Indigena, vol. 12, no. 2, pp. 177-203.

Delbeau, Jean-Claude 1990 Société, Culture et Médicine Populaire Traditionelle, Imp. Henri Dechamps.

Hurbon, L 1969 Dialectique de la Vie et de la Mort autour de l'Arbre dans les Contes Haitiens, in Calame-Griaule, Genevieve ed. Le Theme de l'Arbre dans les Contes Africains, SELAF.

Huxley, Francis 1966 The Invisibles : Voodoo Gods in Haiti, MacGraw-Hill.

Metraux, Alfred 1958 Le Vaudou Haitien, Gallimard.

Mintz, Sidney W. 1985 Sweetness and Power : The Place of Sugar in Modern History, Viking Penguin Inc.

Mintz, Sidney W. & Price Richard 1976 An Anthropological approach to the Afro-American Past. ISHI occasional papers in social change, no. 2, Institute for the Study of Human Issues.

Moral, Paul 1961 Le Paysan Haitien, G.P. Maisonneuve & Larose.

Pierre-Noel, Arsene V. 1989 Les Plantes et les Légumes d'Haiti Qui Guerissent, Tome 1, 2ed. Imp. Le Natal SA.

Rabat, Guy 1973 "Appellations《vulgaires》ou nom vernaculaires des plantes, animaux et roches d'Haiti", Conjonction : Revue Franco-Haitienne No. 120.

Weniger, Bernard & Robineau, Lionel 1989 Elements for a Caribbean Pharmacopeia, Enda-Caribe.

荒井芳廣 1987「日常生活における書物の不在——実用書と識字率」，山岸健偏著『日常生活と社会理論：社会学の視点』，慶応通信所収。

江口信清 1990『カリブ海地域農民社会の研究』，八千代出版。

堀田満ほか編 1989『世界有用植物事典』，平凡社.